

品川シーズンテラス ノースガーデンとサウスガーデン



ノースガーデン



品川シーズンテラス全景



クールスポットとしてのサウスガーデン

取組の位置



周辺地図

地域課題・目的

【地域課題・目的】

- 東京都は昭和6年から稼働する老朽化した芝浦水再生センターの再構築と併せ、地域のまちづくりを誘導する芝浦水再生センターの上部利用事業を行うためのコンペを2008年に実施し、本案が採用されました。
- 芝浦水再生センターは、JR品川駅と田町駅間の中心に位置する約20haに及ぶ敷地です。品川駅及び田町駅周辺には様々な再開発計画が計画されるなか、本整備は、下水処理施設の長期的・段階的再構築の第一歩である敷地約5haの開発です。
- 東京都の「立体都市計画」により下水道施設の立体的範囲を定め、新設下水道施設に免震層を設けその上部に民間事業者が管理するオフィスを主体とした複合ビルを建設します。建築を南側に寄せ、建物の北側の既存下水道施設上に人工地盤を構築し、3.5haに及ぶ広大な緑のオープンスペースを創出します。



ノースガーデン(手前)と芝浦中央公園(奥)

取組内容

- 地域の水・緑・風を活かすエコロジカルなインフラを整備し、地域の賑わいやコミュニティをつなぐことで豊かな人と生態系を育み、今後の品川エリアの環境共生型まちづくりを先導します。
- 東京湾から都心に向かう風の道を確保し、緑のオープンスペース「風の森」によりヒートアイランドを緩和します。
- 水再生センターからの再生水を湿性花園や自動灌水の水源等に利用し、一方クールウォールや保水性舗装の新しい技術を開発しました。



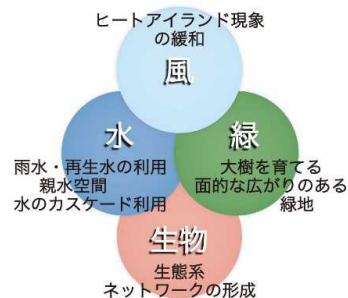
ノースガーデン／芝生の築山、風の森



全体ゾーニング図

取組効果

- 環境モデル建築を目指し、エコロジカルなインフラだけでなく建物も様々な環境配慮技術を採用しCO2削減率49%を実現しました。
- 管理会社STBMIは通常管理の他、広場を使ったヨガ、花見のイベント等によりエリアマネジメントを実施しています。
- クールウォールや保水性舗装、ドライミスト、壁面緑化等の環境技術で快適性を確保します。
- 東京湾からの風は、人工地盤上の風の森により冷却され、都心への到達範囲が拡大します。
- 樹林生態系と沿岸生態系の結節点としての植生を整備し、生態系を充実する緑の拠点となります。



つながる生態系ネットワーク概念図

問い合わせ先

団体名：大成建設株式会社一級建築士事務所
連絡先：yamasita@arch.taisei.co.jp、03-3348-1111(代表)

工夫した点

<水>クールオアシスの創出

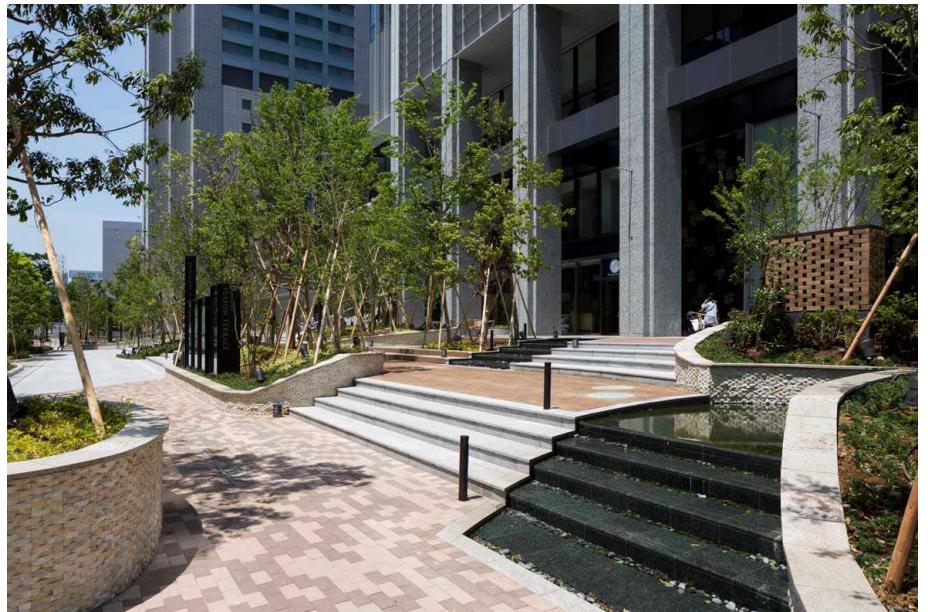
- 品川からのアイストップとなるサウスガーデンは、緑陰の形成や様々な水景施設-壁泉、ウォーターフローウィンドウ、カスケード、さらに今回開発した水の吸水性の高いブロックを用いた給水型クールロード、クールウォール、そしてドライミストを組み合わせるなど、様々なヒートアイランド対策を行うことにより、人々が酷暑から逃れて安らげる涼しい憩いの空間「クールオアシス」を創出しました。

<水>夏の暑さを和らげる保水性ブロックの開発

- カビや白華等の汚れを抑制し、通常のインターロッキングブロックと同等の強度を確保しながら高い吸水性能を持つ保水性ブロックを新しく開発し、舗装や自立壁に使用しました。(特許登録済)



保水性ブロック

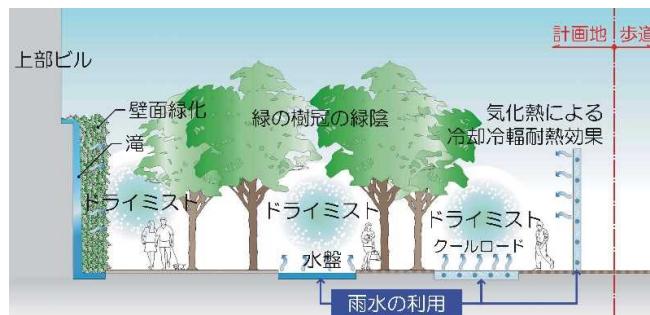


水のカスケードと給水型クールロード（床）
クールウォール（右上）

今後期待される効果

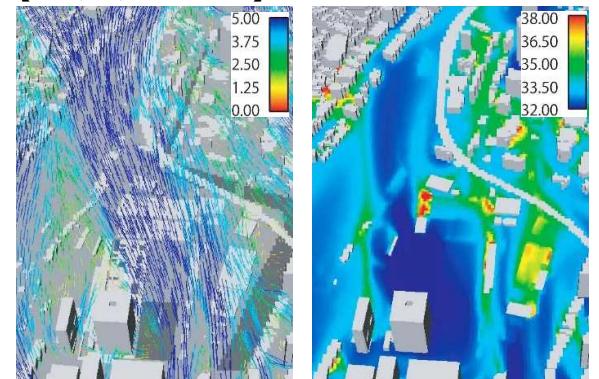
「風」クールアイランド【卓越風に配慮した樹林の配置により風の道を確保】

- 風の道をさえぎらない建物配置と共に緑地計画においても計画地の卓越風向（夏期：南南東、冬期：北北西）の軸線を考慮した樹林の配置とすることで、緑陰形成と風の道の確保の相乗効果が期待できます。
- 樹木による緑陰の形成や水景施設、クールロード、クールウォール、ドライミスト、壁面緑化など様々な環境装置によるヒートアイランド対策により都市の「クールオアシス」を創出しました。



クールオアシス概念図

【シミュレーション】



風の流れ

気温の分布

「緑」郷土種を基本とした植栽

- 計画地の本来の植生（潜在自然植生）は、イノデータブノキ群集です。耐潮性のある樹種を立地条件に適した潜在自然植生や郷土種などから樹種選定を行うことにより、植栽樹木に安定した生育を期待することができます。



東京東部の潜在自然植生

- 1 イノデータブノキ群集
- 2 ヤブコウジスダジイ群集
- 3 シラカシ群集
- 4 オニスゲーハンノキ群集、クサヨシハンノキ群集

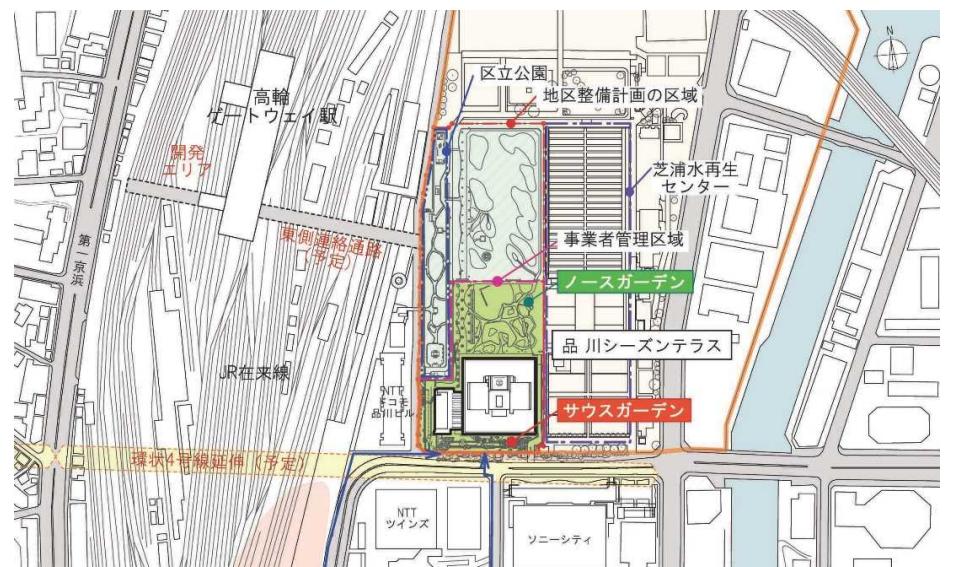
- 郷土種を基本に、花や紅葉など彩りを与え、豊かな緑の空間を創出します。



タブノキ オオシマザクラ イロハモミジメグスリノキ

今後の展望

- JR高輪ゲートウェイ駅の開業に伴い、線路上空の横断デッキ及びデッキに接続する区立公園の整備が今後見込まれています。品川シーズンテラスに隣接しながらも今回は手をつけなかった区立公園の整備に当たって、本施設で取り組んだ水・緑・風を活かすエコロジカル・インフラを導入することで、面的な強化が期待されます。
- 今回整備した敷地の東側には今回と同じ広さの水再生センターが稼働しており、長期的・段階的再構築の中で時代に応じた課題の解決が望まれます。



平面図

Edible KAYABAEN project



取組の位置



地域課題・目的

【地域課題】

中央区の地域課題

- ・共同住宅（マンション）に暮らす世帯の割合が90%で23区内1位、緑被率は23区内最下位の23位
- ▶ **多くの住民がマンション住まい、緑豊かな屋外空間が非常に少ない。持続可能な都市緑化の提案が必要**
- ・フルタイム共働き世帯54.5%、6歳未満の子どもがいる家庭の97.1%が核家族、親に代わって子どもを見てくれる人がいない世帯28.7%、学童クラブ待機率25.8%
- ▶ **共働きの核家族世帯割合が高く、子どもたちの自宅・学校以外の居場所のニーズが高いが対応しきれていない 緑豊かな屋外公園の不足、COVID-19の影響もあり交流の機会が失われている状態**
- ・合計特殊出生率23区内1位、人口の急増（2016年14万人→2022年17万人）、不登校率中学生4.53%（全国3.94%）
- ▶ **人口急増に伴うコミュニティの希薄化が進み、場所の提供と共にコミュニティの担い手が必要とされている**

【目的】

- ▶ **マンションやビルが多いエリアで屋上を利用した食べられる都市緑化のモデルを作り持続可能な緑豊かな街づくりを実現**
- ▶ **子育てを家族の中で完結させるのではなく、地域で担い、子どもを中心に親同士、地域がつながり合うコミュニティを形成**
- ▶ **ビルの屋上菜園で「食と農」という学びを通じ、持続可能な未来に向けて、生きる力を育む人材育成を実施**

取組内容

Edible KAYABAENのオープンとプログラムの実施

日本橋茅場町において、食農体験を通じた誰もが繋がりができる場、楽しめる場、食卓を囲める場、教育が受けられる場、そして居場所をもてる場となるようEdible(=食べられる)KAYABA(=茅場町)EN(=えん：円、縁、宴、園)という名前にその想いを込めて計画・施工。
中央区の課題解決や目指すまちづくりに沿った、環境整備とプログラムの提供、コミュニティの形成を行っています。



取組効果

■新たな緑化公園スペースの創出

約600㎡の食べられる緑化空間を計画しアーバンファームを実践することで都市のアメニティ向上に寄与



■中央区の子供たちの新たな食の学びと居場所づくりへの貢献

2022年5月からスタートした計3回の食農体験イベントに100名以上の子どもたちが参加し収穫や料理を体験



■地域のコミュニティ形成の場の創出

日本橋エリアの地域団体（日本橋七の部連合町会、日本橋パパの会）とオープンガーデンイベントを実施し町のシンボルとなるような場づくりについての意見交換会を実施



問い合わせ先

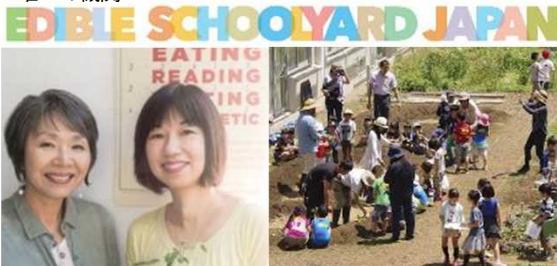
団体名：平和不動産株式会社、株式会社ユニバーサル園芸社
連絡先：株式会社ユニバーサル園芸社 森田宛 E-mail satsuki-morita@uni-green.co.jp. TEL03-5847-2977

工夫した点

校庭菜園から始まった「食育」革命『エディブルスクールヤード』との協働

「すべての子どもたちに学校菜園を」を合言葉に活動するエディブル・スクールヤード・ジャパンと共に食育菜園を計画。菜園を学びの場（教室）に変え、子どもたちのこころと手（体）、頭（考える）をつなぎ食を通じて自然界といのちのつながりを体験的に学ぶエディブル教育を本PJに取り込みました。

エディブル・スクールヤード・ジャパンプロフィール
一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン（ESYJ）は、カリフォルニア州バークレーを拠点に、全米、および世界の教育機関とネットワークするThe Edible Schoolyard Projectの日本における窓口として承認された唯一の機関



エディブル・スクールヤード・ジャパン
(左/代表 堀口博子 右/共同代表 西村和代)

パーマカルチャーの先導者、フィル・キャッシュマン氏のデザイン

計画スタート時からパーマカルチャー（持続可能な農業と文化）の専門家であるフィル・キャッシュマン氏とこの場の目指す未来、それを実現する空間のデザイン、場の活用方法まで、共に検討を進めました。

それにより、チームビルディングの段階から課題に対して本質的なデザインとプログラムを計画しました。

フィル・キャッシュマン氏プロフィール
パーマカルチャーの提唱者、ビル・モリソン氏にオーストラリアのメルボルンで直接指導を受け日本に戻ってから神奈川県葉山町で実践と研究を重ねパーマカルチャーの専門家として日本各地で活躍



パーマカルチャーデザイナー フィル・キャッシュマン氏

「誰もが“居場所”を持てる街を目指した再開発でビルの屋上を活用

本PJは、「日本橋茅場町・兜町再活性プロジェクト」の一環として生まれました。渋沢栄一がこの地に銀行・証券の礎を築いて150年。投資と成長を金融だけでなく未来を担う子どもたちにも、と考え計画しました。また中央区の課題である緑あるまちづくりに貢献する目的で、ユニバーサル園芸社と共に、ビルの屋上を食べられる庭に変化させました。



今後期待される効果

教育機関との協働

教育として「食と農」へ投資する社会にしていくには感覚だけでなくエビデンスが重要。また都市部の自然の不足、コロナ禍の影響もあり子どもたちへの精神的影響は大きく深刻化。ガーデニングセラピーという手段で都市部の健やかなライフスタイル構築に向け教育機関との協働を企画。

地域外の皆さま

活動に共感し支援したいと思ってくださる方との関わり

地域飲食店との連携

店舗ででた飲食ゴミをガーデン内のコンポストにより堆肥化し再活用。
またFARM TO TABLEイベントの共同開催。

地元小学校との連携

地元小学校と協働し、授業の一貫としての「食育菜園」体験の提供

地域企業の皆さまとの協働

近隣企業の活動支援による必要資材の提供や福利厚生としてのプログラム提供

町会、地域団体とのコミュニティ形成

地域の住民団体との協働によるコミュニティ醸成



今後の展望

都市の学べる&食べられる緑化のモデルガーデンへ

Edible KAYABAENIは始まったばかりの、可能性に溢れたガーデンです。そして場のデザイン、そして場活用においてパーマカルチャーやエディブル教育の内容を踏まえてつくられました。ハード+ソフト両面において今後のアーバンファーミングや教育としての屋上菜園の利用におけるモデルとなるガーデンになる場所です。まずはこの地で、エリアの皆さんを巻き込み子どもたちを中心に誰もがつながれる場づくりを行っていきます。

品川セントラルガーデン



取組の位置



地域課題・目的

【地域課題】

【計画時】高さ150m級の高層ビル群が林立するオフィス街の中でもビル群のボリューム感に負けない、地域住民や近隣で働く人のための緑豊かな憩いの場が必要だった。

【現状】近年は周辺で再開発が進んでいるため、竣工後20年を超える当該地区に価値向上のための取組が求められている。

【目的】

【計画時】高層ビルの圧迫感を感じさせない解放感のある空間にする。大規模で安全、快適かつ緑豊かな憩いの場を創出する。

【現状】約20年間育ててきた緑地の魅力を最大限引き出すことで、ポストコロナも含めたニーズの多様化に対応し、近隣で働く人や住民の満足度を高める。

取組内容

- 両側のビル所有者、港区、品川区と協働で幅約40m、長さ約400mの緑地を整備した。広さ・緑量ともに都心のオフィスエリアとしては最大クラスである。
- 約20年前に整備された場所でありながら、歩きやすさや緑地機能を最大限活かす計画のもと緑地を整備し、その考え方を継承しながら魅力的な緑地に育ててきた。
- 東京都しゃれた街並みづくり推進条例に基づいてイベント等を開催し、積極的に緑地を活用している。

取組効果

- 落葉樹を多く配置したため、夏は木陰ができ、冬は陽だまりができるので、快適に過ごせる空間となっている。
- 平日はランチを食べるオフィスワーカーで賑わっている。夏場でも多くの人が木の下で読書などを楽しんでいる。
- 歩行者専用空間で歩きやすいため、親子連れで遊ぶ姿や散歩を楽しむ姿がよく見られる。
- イベントには近隣で働く人や住民などで賑わっており、地域の魅力向上につながっている。



竣工時の様子



約290本の木々が並び



映画祭や健康促進イベントを開催



問い合わせ先

団体名：日鉄興和不動産(株)、住友生命保険相互会社、(株)大林組、品川グランドcommons
連絡先：(株)大林組 技術研究所 自然環境技術研究部 高森万貴 E-mail: takamori.maki@obayashi.co.jp

工夫した点

- ビル風を緩和するために、常緑樹のシラカシを列植した。植栽の機能的な配置により居心地の良い空間となっている。
- 2階の歩行者専用デッキ(スカイウェイ)から潤いある緑の景観が眺められる。春は桜が咲き、人々の目を楽しませている。
- ガーデンは南北方向を軸に設計されており、夏は南から北へ風が通り抜ける。建物からの廃熱等の影響で気温が高い敷地の南北端と比べて、中央付近の気温は約1.5~2℃涼しい。
- 中央に行くにしたがって下がる船底状の細長い空間としたため、広さがより一層強調されて開放的な雰囲気となっている。歩きやすさを意識して3%勾配とした。
- 人の滞留スペースには芝生面やビオトープなどを設け、雨水浸透、暑熱緩和、生物多様性保全に貢献している。
- 港区主催のみなど生物多様性パネル展に出展し、生物多様性に関わる取組を紹介するなど地域の環境教育に貢献している。
- 品川の自然をテーマに7つのフォリー(造形物)を制作した。テーマに関連した品川の歴史や地形を看板で紹介し、文化の継承を図った。
- 2022年には健康経営の普及を目的としたイベントや港区後援で映画祭を開催した。映画祭の中では地元団体による音楽やダンスのステージも行われた。過去には国内最大級のラグビーWCイベントや官民連携でラグビーWCのパブリックビューイングを開催しており、人々の交流の場となっている。

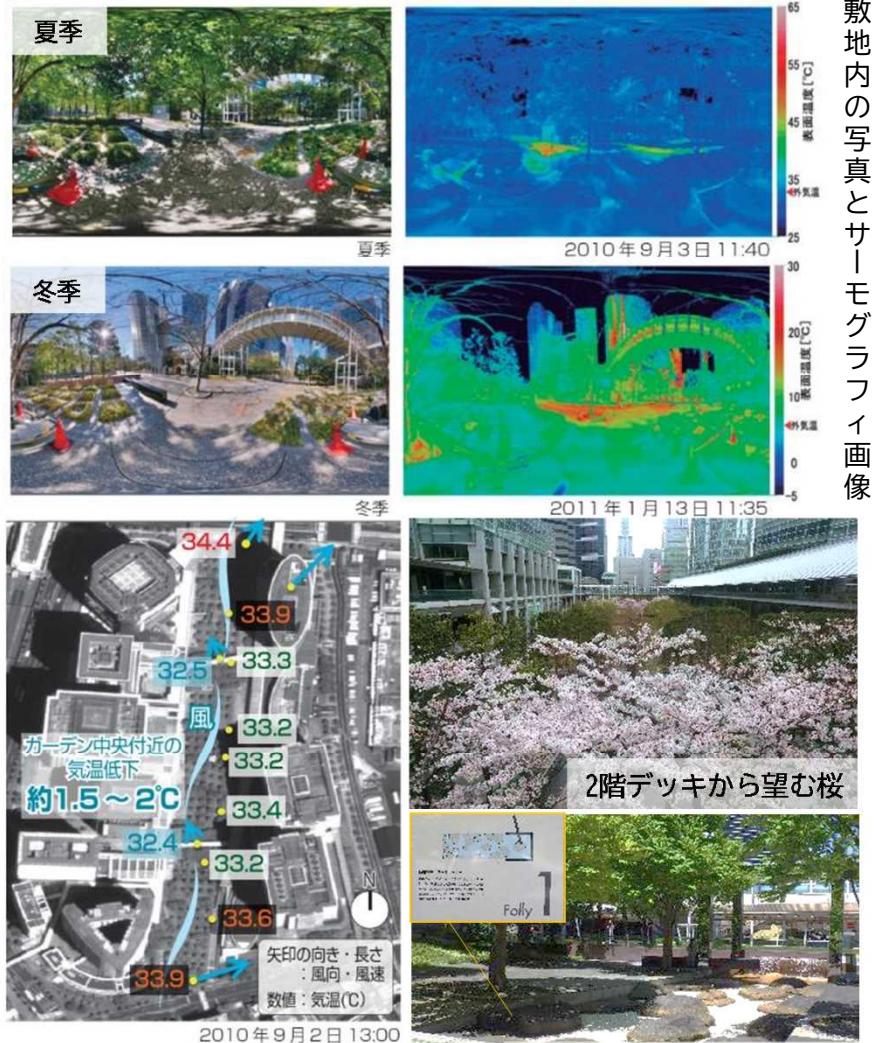


今後期待される効果

- 消防署・港区・複数の企業と連携して継続的に防災訓練や防災イベントを開催し、地域防災力の向上を目指す。
- 2010~2011年実施の環境調査では、202種の昆虫類とハヤブサを含む18種の鳥類が確認された。CO2固定量は年間約9.7tだった。2017年に樹木による降雨遮断効果を測定した結果、雨量の約2-3割が遮断されていた。今後も様々な緑の効果を定量評価し、生物多様性や環境の維持・向上に役立てたい。
- 2022年度は利用実態調査、「まちの居心地の良さを測る指標(案)」を用いた評価、気象観測を実施している。緑地利用の優良事例として知見を蓄積していく。
- 緑豊かな空間は清涼感のある憩いの場をもたらすだけでなく、温暖化により激甚化する風水害の軽減も期待される。

今後の展望

- ポストコロナのニーズ変化に対応した空間への転換に取り組む。多様な働き方を支援する取組やテイクアウトの食事が楽しめる職住一体空間を提供し、ウェルビーイングを実現する。イベント開催時だけでなく、日常から賑わいを創出し、地域交流の活性化に努める。
- セントラルガーデンにおける取組をより円滑に推進するために、両側のビル所有者が参加するエリアマネジメント組織の結成に向けて協議を進める。
- 約20年間、適切に維持管理し魅力的な緑地に育ててきた。今後も様々な取組を通して人々に愛される空間づくりを目指す。

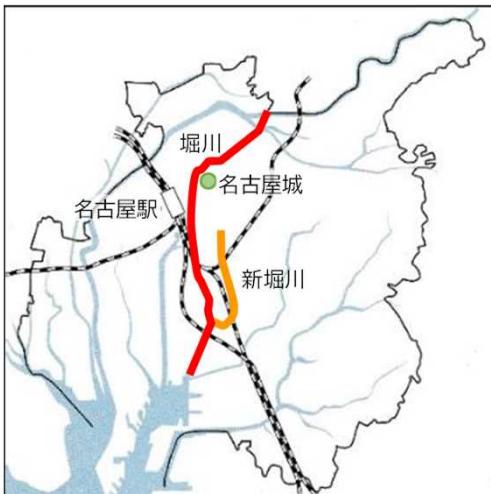


敷地内の写真とサーモグラフィ画像

名古屋の母なる川・堀川の再生



取組の位置



地域課題・目的

【地域課題】

- 堀川は1610年名古屋城築城と時を同じくして開削され、名古屋の発展を支えるとともに、人々に親しまれる憩いの場だったが、物流が陸上輸送に移行したことや水質汚濁等の影響により、堀川の水辺から人々が遠ざかっていった
- 近年多発する豪雨災害への対応として、堀川の治水整備が急務である

【目的】

- 「治水整備」「浄化」「にぎわいの創出」を総合的に進めることで、「うるおいと活気の都市軸・堀川」を再びよみがえらせる
- 堀川には様々な活動をしている団体があることから、民産学官のパートナーシップによる持続可能な「堀川まちづくり」の体制を構築する

取組内容

- 堀川で活動する民産学官の団体からなる「堀川まちづくりの会」を2013年に設置し、堀川の魅力向上に向けた意見交換や情報共有を行い、連携を強化
- 「堀川1000人調査隊」による市民目線の水質調査の取り組みを支援するとともに、市民調査結果の報告会を年2回開催（2007年から継続中）
- 生物の生息環境創出や水質浄化のため、上流部で瀬淵を設置し、市民団体主催の生物観察会を毎年実施
- にぎわいの創出のため、治水整備にあわせて遊歩道や親水広場を整備し、イベント等で活用

【イベント事例】

黒川友禅流し（1999年～毎年春開催）

フラワーフェスティバル（2007年～毎年春開催）

なやばし夜イチ（2010年～毎月第4金曜開催）

取組効果

- 「堀川1000人調査隊」は2022年3月時点で53,717の方に登録いただいております。堀川浄化の輪が広がっている（2007年の発足時は2,262人）
- 「堀川フラワーフェスティバル」では、これまでにハンギングバスケットの作成に約5,000の方に参加いただき、堀川の水辺空間演出につながっている
- 納屋橋地区のイベント開催日数は2021年度に99件まで増加した（社会実験を開始した2005年度は10件）



親水広場を活用したイベント 市民団体による水質調査 ハンギングバスケット作成会

工夫した点

【各団体の取り組みの支援】

- 市民団体等の取り組みについては各団体の意向を尊重し、各自が主役となって堀川の魅力を発信できるよう、市として取り組みをサポートしている

【水質浄化の推進に向けた連携】

- 市の浄化施策と市民団体の調査結果を堀川1000人調査隊報告会の場で共有し、双方のキャッチボールにより浄化効果の可視化や新たな対策の実施につなげている

【イベント開催の際の工夫】

- 堀川フラワーフェスティバルでは、ただ川沿いに花を飾るのではなく、ハンギングバスケット作成を市民参加で実施している。また、ゴンドラや船に乗れるイベントを同時に開催し、花で彩られた堀川を水面から楽しんでいただいている
- 堀川は汚いというイメージを払拭するため、フラワーフェスティバル期間中にフォトコンテストを開催し、花で彩られた堀川の魅力的な写真を撮影していただいている。堀川PRの際には、コンテストでグランプリを受賞した作品を利用するなど、堀川のイメージアップに役立っている



堀川1000人調査隊報告会議



フォトコンテストの応募作品

今後期待される効果

【堀川の魅力のさらなる向上】

- 多くのイベントが10年以上にわたって実施されており、これまでに非常に多くの方に参加していただいている。今後も継続して取り組むことで、堀川ファンの増加やさらなる魅力的なイベントの開催などが期待される
- 上流部では、市と市民が協働で桜の保全に取り組んでおり、将来にわたって良好な水辺空間が維持できる



黒川友禪



上流部の桜

【堀川や環境問題に対する関心の高まり】

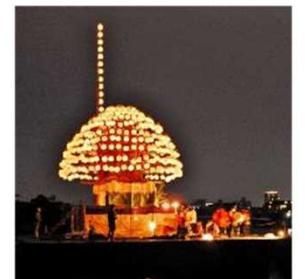
- 堀川の生物観察会は地域の小学生などを対象に行っており、堀川の自然環境について学んでいただくことで、堀川への愛着だけでなく、環境問題への関心の高まりが期待される

【連携の促進、強化】

- 堀川まちづくりの会は2021年度末時点で27団体（2013年設立時22団体）に増えており、今後さらなる連携が期待される



堀川一斉大そうじ



堀川まつり

今後の展望

【名古屋の魅力向上に向けて】

- 本市は、2026年アジア大会やりニア開業を控えているほか、名古屋城木造天守閣復元に取り組むなど、名古屋を訪れる人の増加が見込まれる。その際に、名古屋の歴史や文化を伝えるとともに、名古屋の南北を結ぶ軸として、また魅力的な水辺空間として利活用してもらえよう堀川の再生を進めることで、都市の魅力向上につなげていく
- 堀川の再生には、支川の新堀川も含めた水質浄化の取り組みが不可欠であり、堀川1000人調査隊による調査結果を踏まえ、新規水源の確保などの対策を検討・実施し、さらなる水質浄化を進める
- 納屋橋地区では夜間景観の演出に取り組むなど、良好な水辺空間の創出を進めている。他地区でも水辺活用の取り組みを展開し、堀川全域でさらなるにぎわい創出を進める
- 堀川は、名古屋城や熱田神宮を結ぶ軸として、舟運活性化に向けた検討を市で進めており、舟運により堀川の水辺空間を楽しむ機会を創出する

【水害から名古屋を守る】

- 河川整備の早期完了を目指し、名古屋駅を含む都心部を水害から守る



納屋橋地区ライトアップ整備



尾頭橋親水広場社会実験

大阪梅田ツインタワーズ・サウスから広がる「梅ーグリーンプロジェクト」



阪急梅田方面から望む（梅ービュー）

取組の位置



取組内容

- 大阪の玄関口に相応しい、大規模で高質な視認性の高い屋上緑化、壁面緑化を実現。
- ビルを中心とした緑化促進の取り組みを「梅ーグリーンプロジェクト」とネーミングし、兵庫県立大学、一般社団法人梅田1丁目エリアマネジメント等と協働、地域連携と活性化を図る。

取組効果

- 大阪梅田ツインタワーズ・サウスと御堂筋の街路樹が一体化し、梅ービューとして壮大な緑の景観を形成し、梅田1丁目の地上の魅力を向上。
- 現地での都市緑化効果の研究成果を見える化、植物を使ったイベントなどを通じて、地域、ワーカーとの交流と賑わいを創出する。

地域課題・目的

【地域課題】

- 本プロジェクトが位置する梅田1丁目地区は、大阪の玄関口にあるにもかかわらず、目に見える地上部の緑が少なく、近年大規模な緑化を伴う開発が続く大阪駅周辺エリアにおいて、相対的な魅力低下が懸念されていた。
- 地域には多くの関係者が存在し、その連携を深めるためにエリアマネジメント団体が設立され、緑に関連する活動が模索されていた。

【目的】

- 大阪梅田ツインタワーズ・サウスの緑をハブにして「梅田地区全体の緑の広がりと持続的発展」を目指す。
- 緑を端緒として、地域連携の強化を図ることにより「地上の出会いと交流を促進」する。

キャンペーンポスター



UMEICHI
GREEN
PROJECT
梅ーグリーンプロジェクト

「みどり」にであい
「みどり」に気づく
いいこち良い梅田

壁面緑化のメッシュプランター



工夫した点

- 阪神電車と阪急電車の起点である梅田。両電車の経由地の六甲山、淀川水系に生息する樹種の中から、都市の生育環境への適合性、建物外装と調和した景観やメンテナンス性など、2015年より実寸でモックアップを製作し、育成実験を繰り返し検証した。
- 実験の過程で、気温やプランター内の土壌水分量と、樹木の生育状況を計測・観察し、灌水量を最適化し、異常時には緊急操作をリモートできるシステムを開発、導入した。
- 大阪梅田ツインタワーズ・サウスの一階部分に、モニターを使って映像で緑の魅力を発信し、また「ガーデナーのお仕事」を魅せる場所「みどりのコンシェルジュSTATION」を設置。
- プロジェクトを機に、都市緑化の普及や、ヒートアイランド現象緩和の環境意識の広がりを共通目標に、兵庫県立大学大学院、兵庫県立淡路景観園芸学校と産学連携協定を締結。
- 緑化施設資産のオフバランス化（造園会社保有）により、維持管理費用の平準化、持続的な景観維持を「阪神園芸グリーンニングサービス」として仕組み化した。



生育環境を模したモックアップを製作し検証



エリマネ団体・地域の方との清掃活動



産学連携の協定式の様子



都市緑化効果や、ガーデナーのお仕事を発信するみどりのコンシェルジュSTATION

今後期待される効果

- 梅田で地上の緑視率を上げることで、オフィスワーカーの日常に安らぎを与え、その緑の効果を学術機関とともに見える化することで、都市緑化やグリーンインフラへの関心を高める。
- 一社）梅田1丁目エリアマネジメントと地域活動、緑化イベント等を共催し、地上に賑わいをもたらすことで、ビルから地域へとウェルビーイングな街づくりへつなげる。
- 都市緑化を維持するガーデナーに親しみを感じてもらうことで、環境に寄与する造園業界のイメージアップを図り、近年減少傾向にある就業希望者の増加を目指す。



今後の展望

- エリア全体への拡張ビジョン
開発中のうめきた2期とともに、「緑のまち梅田」の実現に貢献し、さらなる事業者の投資意欲の高揚を図る。
- 緑の質と価値を守る手法の確立
時が経つにつれ、コスト削減要請もあって、当初の設計思想が維持できない緑が散見されるなか、持続可能で高質な緑を維持する「阪神園芸グリーンニングサービス」の手法を確立していく。
- みどりのコンシェルジュSTATIONの活用
大学のサテライト授業や研究発表、同業者や組合組織、NPO団体などと連携し、環境についての啓蒙活動、都市緑化や造園業の魅力を伝える場所として活用し、梅田全体へ緑やグリーンインフラの普及を促していく。